14 日目　岡崎 -> 知立

14 日目は 9 月 18 日(土)、前回到達地点の名鉄美合駅を 7 時にスタート、晴天。　薄い雲がかかり、日差しに荒々しさはなく、猛暑は過ぎた模様。　FM ラジオは受信快調、しかし「菅改造内閣」の報道で、歩きながら聞きたい内容ではなくミュージックプレーヤに切り替え、スタートはベートベンの月光、穏やかな雰囲気で歩き始める。

美合から大平　大岡越前守

ぽつんと 1 本、東海道の松並木

美合は前の宿場の藤川と次の岡崎の中間地点にあり岡崎までは 5Km 程、30 分ほど町中を歩いていく。
早朝の土曜日、人も車も少なく、たまに家の前の掃除をしている人を見かける程度、前から来た女子中学生(多分)に「お早うございます」と挨拶され、慌てて挨拶を返し、今日もいい日とうれしくなる、単純だなぁ。
人家が途切れ、郊外となって緑が多くなると、やがて東海道の目印である松が道路脇に一本、更に行くと常夜燈や道標が現れ、神社や寺が続いてやっと東海道の雰囲気、地名は大平で大平一里塚があり、案内板に西大平藩、大岡越前守陣屋跡とある。

大岡越前守陣屋跡の 4 ヶ国語の説明

大岡裁きで有名な名奉行大岡越前守忠相は将軍吉宗に重用され、1 万石の大名となり、この地を領地としたとか。　そう言えば暴れん坊将軍では時々大岡越前守も顔を出している。

寄り道をしてその陣屋跡を見学。　立派な門があり、門の中には屋敷跡と神社のみ。
大岡越前守自身は此処には住まなかったが子孫は明治までこの陣屋に住んでいたとのこと。

大岡越前守陣屋跡、門のみ

岡崎宿　　38 番目

岡崎城下 27 曲りの碑

大平を後にして旧東海道は国道一号線に合流し、時にはその側道となり、再び市街地となって 38 番目の宿場の岡崎に到着。

岡崎には本陣・旅籠等の宿場の建物は残っていないが町の作りは殆どそのまま残っていて、有名な 27 曲りがある。　その 27 曲りのスタートの地点に案内板があり、その案内に従い、標識に沿って歩き始める。　今までの城下町にも 7 曲りや、曲尺などの地名・通りがあり、全て敵の攻撃を困難にする為。　その中でも岡崎の 27 曲りは特別に多い。

再び国道 1 号線と交わるまでに歩いた曲り角を数えたら 21 だった、少しサバを読んでいる様である。
道路標識に沿って歩くものの、標識は必ずしも曲がり角に無く、曲がってから 5～6m 先にあったりして何度か迷いつつ歩き、結構時間がかかってしまった、太陽が出ていなかったら多分方向を見失っていたに違いない。

お茶壷道中

田中吉政

御馳走屋敷

27 曲りの道沿いに、江戸時代の風物、お茶壷道中・朝鮮通信使・助郷・田中吉政・飯盛女・人馬継立・三度飛脚・塩座・御馳走屋敷を石像にしてある。　お茶壷道中とは、宇治茶を将軍に献上する為の一行、各宿場で 100 人の人足を出す定めがあり、各宿場での負担が大きく、恐れられたとのこと。　田中吉政とは豊臣秀吉が徳川家康を関東に移封したあとに送り込んだ岡崎城主で、関東の徳川家康に備えて城下町づくりを行い、27 曲がりなどを作った人、難問だったらしくしかめ面をしている。　御馳走屋敷の石像はユーモラスで、魚を頭上に抱えて差し出している。　説明によると、御馳走とは接待を意味し、公用の役人をもてなすための岡崎藩の迎賓館の役割を持っていた屋敷とのこと。

連雀(連尺)の由来
この岡崎には伝馬町や連尺と言う地名があり、今迄に歩いた城下町でも同じ地名があって、伝馬町は分かるとして連尺は分からず、どんな意味かとインターネットで調べた。
「物を背負うのに用いる背負子（しょいこ）の連雀は、肩に当たる部分を広く編んで作った縄や、それを木の枠に取り付けた物で、連尺とも書く。　江戸時代の行商の多くは、この連雀に荷物を担いで、各地を往来していた。また、連雀で運搬する行商を連雀衆ともいう。　本来、「連雀」とは渡り鳥の雀を指していた。「連尺」を用いる行商が渡り鳥のように見えた事から、「連雀」が「連尺」の同義語として用いられるようになった。江戸時代の城下町には、行商が連尺に荷を繋げたまま荷物を下ろし、そこに店を出した地域があり、これが各地の「連尺」「連雀」「連尺町」の由来となっている」　つまり三鷹の上連雀下連雀も同じ。

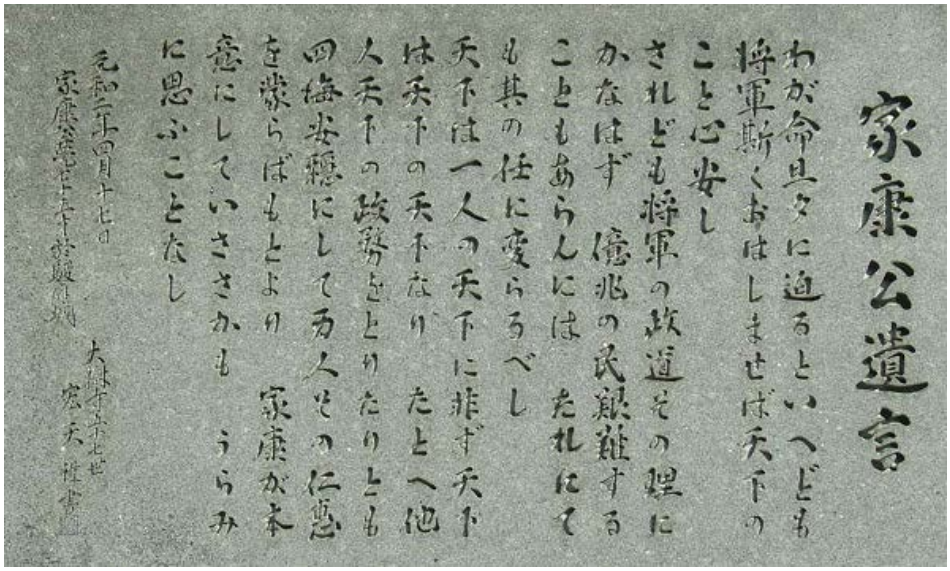
岡崎城
27 曲りを過ぎると岡崎城公園への横道があり、岡崎城に寄り道。　公園内は整備され、池には噴水があり、赤い欄干の橋もかかり木々の緑とマッチしていて綺麗。

岡崎城天守閣

岡崎城内のマンホールの蓋

散歩の人もチラホラ、他の城で見かけるジョギングの人はいない、既にジョギングには遅い時間かもしれない。　天守閣も立派で中にはいりたかったが、天守閣見学は９時からで、時刻は８時半、入城は断念。城内には家康像や本多平八郎像などもあるが、時間的な余裕がなくパス。

家康遺言



「家康公遺言」の石碑があり、「わが命旦夕に迫るといへども　将軍欺くおはしませば天下のこと心安しされども将軍の政道その理にかなはず　億兆の民艱難することもあらんには　たれにても其の任に代らるべし　天下は一人の天下に非ず天下は天下の天下なり　たとへ他人天下の政務をとりたりとも　四海安穏にして万人その仁恵を蒙らばもとより　家康が本意にしていささかも　うらみに思ふことなし」とある。

秀頼への権力移譲に綿綿として五大老に誓詞を出させた秀吉とは全く違う。　家康とはそんな人物だったのか。家臣やブレーンに人を得たのか。　或いは既に秀忠の治世が定まり、自信が書かせたものか。
いずれにしても、家系・血筋を重んじた江戸時代の官僚制度とは矛盾する立派な遺言。

八丁味噌

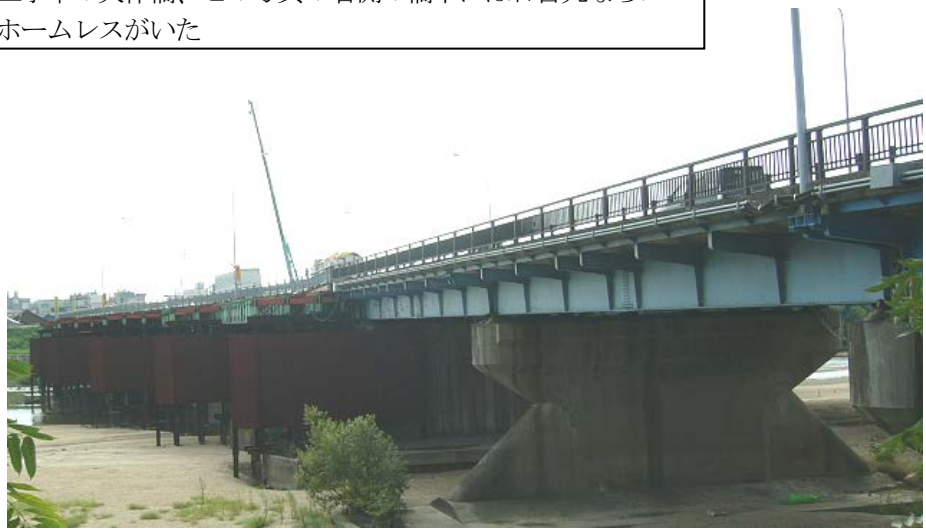
八丁味噌メーカーの家々

岡崎城公園を出て、10 分ほど歩くと、八丁味噌で名高い味噌屋が並んだ一角があり、味噌作りの古い土蔵を残した家が並び、その中を歩くとかなり強く味噌の匂いが漂う。　ガイドブックによれば見学者には無料で味噌こんにゃくをふるまうとか、早朝でもあり、さほど食べたいとは思わず次ぎへ急ぐ。

矢作橋

八丁味噌の匂いに別れを告げて国道一号線に合流すると直ぐに矢作川があり、かかっているのは矢作橋。　東海道 3 大橋の一つであり他の二つは瀬田の唐橋と豊橋。　工事中の矢作橋を渡り、この橋で出会ったという蜂須賀小六と日吉丸の出会い像を見るつもりだったが、残念ながら橋の工事の為に像は撤去され、出会い像の写真と説明版のみ。

工事中の矢作橋、この写真の右側の橋下には日吉丸ならぬホームレスがいた



蜂須賀小六と日吉丸

出会い像

インターネットで調べると、日吉丸が矢作橋の上で寝ていたところ、付近を荒らしていた野武士の一団が通りかかり、その頭が日吉丸の頭を蹴ったところ日吉丸はこれを咎め、侘びていけと頭を睨みつけた。この頭は海東郡蜂須賀村に住んでいた小六正勝であり、日吉丸の度胸の大きさを買って手下にしたという。
実際には、矢作橋が架けられた 1601 年には豊臣秀吉は幼少時代どころか既に亡くなっているため、この話は作り話であるとされているが、この逸話を伝えるために矢作橋の西側に「出合之像」が平成元年に建てられたとのこと。

何の漫画か忘れたが、木下藤吉郎の片腕として働く蜂須賀小六はもっと若かったのに、この像では年配だし、大体これが盗賊の衣装かと突っ込みたくなる。
そこで再びインターネットで調べたところ日吉丸と小六の年齢差は10～11歳、漫画のイメージの方が正しい。

柿崎松並木と予科練碑
矢作川を後にして国道１号線を半時間ほどひたすら歩くと標識が岡崎から安城へと変わり、道が二股となり、左側は自動車道、右側は緑の松並木となり、地図がなくとも一目瞭然で右側が旧東海道、柿崎の松並木となる。

左１号線、右は柿崎の松並木

予科練の碑

松並木の木陰を歩いていくと尾崎一里塚があり、そこで一休み。
その一里塚の横の神社の入り口に予科練碑があった。　予科練といえば、七つボタンの歌から霞ヶ浦とばかり思っていたが、当地の第一岡崎海軍航空隊は予科練の揺籃の地とあった。

戦争賛美には反感を持つが、一緒に学んだ戦友が戦死した友の霊を慰める為に立てたとあれば合掌。

雲竜の松

尾崎一里塚から 10 分程歩くと、永安寺があり、「雲竜の松」があった。
この松は、樹齢 300 年、高さは 4.5m でさほど大きくはないが、枝張りが東西 17m、南北 24m と大きく、その形が雲を得てまさに天に昇ろうとする竜を思わせるので雲竜の松と呼ばれることになったとのこと。松の枝を人工的に水平に伸ばしていく日本庭園の松の極致かも。

雲竜の松、松林に見えるが一本の松

かきつばた

無量寿寺の説明板

雲竜の松から 30 分程歩いて来迎寺一里塚となり、このあたりは既に知立市、来迎寺公園で一休み、地図を見ると脇道がかきつばた池のある無量寿寺に伸びている、このかきつばた池は伊勢物語で在原業平が「かきつばた」を織り込んだ「唐衣　きつつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　旅をしぞおもふ」を詠んだところ。　確かに高校の頃そんなことを勉強した記憶がかすかにある。「昔、男ありけり」だったな、それは行かねばなるまいと寄り道。　10 分程歩いて無量寿寺に到着、寺内は大きく、時間的余裕が無くなり、入り口付近を見学しただけで退散。

煮込みの昼食

時刻は 12 時、名古屋在住の友人 I 氏と昼食の約束があり、ウォーキングを中断し、近くの名鉄牛田駅から電車で待ち合わせ場所へ。　I 氏と落ち合い、本日の昼食は煮込み定食、名古屋風の濃い味で、I 氏でも「濃すぎる」と云ったほど、身体を動かしているので塩分補給には丁度良いのかも。　お代は I 氏の奢り、有難う。　久しぶりに会ったので 1 時間ほどしゃべった後に名鉄牛田駅に後戻りをして、再スタート、I 氏も同行。

知立の松並木
名鉄牛田駅を出て旧東海道に戻り、10 分程歩くと知立の松並木となる。　距離は約 500m、側道があるのが特徴で、近くに馬市があり、馬市の時に側道に馬を繋いだもの。　今迄の各宿場の松並木でも側道があるのは沢山あったが、ここの側道は江戸時代からの由緒正しい側道。　側道には小さな池が作ってあり、石像や石碑があって、写真を撮りながら歩く。　一茶の句碑は、「はつ雪や　ちりふの市の銭かます」とあり、引馬野の歌碑は万葉集の「引馬野に　にほふはりはら　いりみだれ　衣にほわせ　たびのしるしに」、現代の歌人麦人の「かきつばた　名に八つ橋のなつかしく　蝶つばめ　馬市たてしあととめて」があった。

知立の松並木

一茶の句碑

引馬野の歌碑

知立宿　39 番目
松並木を過ぎ、暫く歩くと知立の宿場となる。　と言っても本陣等は残っていないが、歴史を感じさせる古い家が多い。写真を見て頂きたいが、池鯉鮒宿問屋場跡と書いてある。
知立は池鯉鮒とも書く、池に鯉や鮒がいたからではなくて、インターネットで調べると、昔は「ちりふ」と書き、やがて池鯉鮒の字があてられ、その後に知立の字があてられるようになったらしい。
それでは「ちりふ」とは一体どんな意味かと興味を持ち、調べると、語源は「茅立」、茅の育つ湿地帯を意味するという。

問屋場跡

古いお菓子屋

この宿場の中にあるお菓子屋さんの建物の作り・引き戸やショーウィンドウのたたずまいがいかにも古く、ここも看板は「池鯉鮒」、後で調べたら旅籠を改造して明治８年創業の有名なまんじゅう屋とのこと。

ふりむけば　ご恩を受けた　人ばかり
宿場の古いお寺の前の掲示板に「ふりむけば　ご恩を受けた　人ばかり」とある。　山頭火の句のようにも、有難いお言葉のようにも見え、写真。　更にその隣のそろばん教室の入り口には大きなそろばん、今時こんなものがあるのを見ると嬉しくなる。

お寺の掲示板

そろばん教室の「看板」

知立神社の多宝塔

面白い形の二重の塔が見え、何かと思えば知立神社の多宝塔、明治時代の神仏混淆で寺の多宝塔が神社のものになったらしい。この多宝塔は 1506 年に再建された国の重要文化財で、「蝮よけ、長虫よけ」にご利益があるとのこと、屋根と屋根の間の部屋の部分(正しい名称を知らなくてすみません)が見慣れた三重塔や五重塔と異なっていて、丸くて優美。

境内には芭蕉の句碑、
不断堂川
池鯉鮒の宿農
木綿市　　芭蕉翁

ふだんたつ
ちりふのしゅくの
もめんいち)

芭蕉は万葉かなで書いたのか。

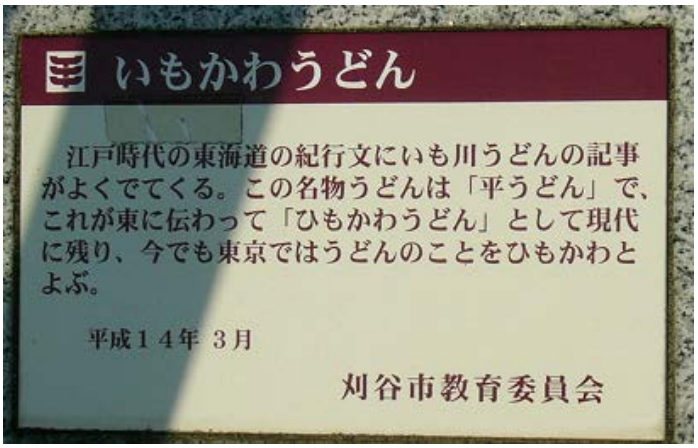
芭蕉句碑

逢妻橋

知立宿を出て暫く歩くと逢妻川があり、逢妻橋を渡る、このへんの町名は逢妻町。　逢妻とは何と意味ありげな!
インターネットで調べ.ると、別名芋川とあり、ずっこけそうになる。逢妻男川と逢妻女川の合流点を上流とする川ともあり、やはり何かありそうで、結局わからなかった。　この橋の欄干には先ほどの知立神社の多宝塔とかきつばたがシンボライズされている。

逢妻橋の欄干

いもかわうどん



気がかりな逢妻町を離れ、旧東海道は国道 1 号線と合流し、行政的には刈谷市となる。　次の鳴海宿にむかって 30 分ほど歩き、又　国道 1 号線と分かれ、町中を歩いていると、「いもかわうどん発祥地」の碑があった。
いもかわうどんとは初めて聞く名前、名古屋在住のＩ氏も知らないとのこと。　碑によれば今でも東京ではうどんのことを「ひもかわ」とよぶとか、知らなかった。

かきつばたのマンホールの蓋
今回の「凝ってはる」ものは安城、知立、刈谷の下水のマンホールや消火栓の蓋、かきつばたをモチーフにしてデザインしている。

余ったスペースに
I 氏撮影の私の
猛暑スタイル

更に 1 時間ほど歩いて、知立宿と鳴海宿の中間点となる名鉄豊明駅に 16 時に到着。
14 日目は 5.5 万歩で約 35Km、寄り道や昼食時間が多かった為、宿場は 2 つのみ。
猛暑はやわらぎ、風もあって汗ポタはなく歩き易い、本日の飲んだペットボトルは 3 本。

今回も新宿駅を深夜 12 時に出る夜行バスに乗り、夜中にもかかわらず高速道路は渋滞し、予定より 1 時間遅れて朝の 6 時に東岡崎着、7 時に名鉄美合駅からスタート、帰りは名鉄豊明駅から名古屋、名古屋 17 時半発の高速バスに乗り新宿に 23 時帰着。

次回は　鳴海 -> 宮　　桑名 -> 四日市

14日目